

9月の栽培管理

リンゴ

○生育状況

県南部における果実肥大は、「つがる」は平年並み、「やたか」、「王林」、「ふじ」は平年より大きい。硬度および糖度は各品種ともほぼ平年並みで、リンゴ酸含量は「王林」で低い（表1）。

表1 県南部のリンゴの生育状況（果樹試験場 9月1日現在）

品種	項目	計測値			対比(%)	
		本年	平年	前年	平年	前年
つがる	果重(g)	274.4	274.9	243.9	100%	113%
	縦径(cm)	7.70	7.75	7.33	99%	105%
	横径(cm)	8.74	8.81	8.41	99%	104%
	硬度(lbs)	14.8	14.1	15.9	105%	93%
	糖度(Brix %)	11.8	12.3	13.4	96%	88%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.313	0.312	0.313	100%	100%
やたか	果重(g)	273.8	254.8	234.4	107%	117%
	縦径(cm)	8.02	7.53	7.46	107%	108%
	横径(cm)	8.71	8.51	8.19	102%	106%
	硬度(lbs)	15.7	16.2	17.2	97%	91%
	糖度(Brix %)	11.2	11.4	11.4	98%	98%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.420	0.443	0.526	95%	80%
王林	果重(g)	241.3	213.5	205.9	113%	117%
	縦径(cm)	8.19	7.48	7.39	109%	111%
	横径(cm)	7.95	7.61	7.56	104%	105%
	硬度(lbs)	20.5	20.3	21.2	101%	97%
	糖度(Brix %)	10.6	10.6	11.6	100%	91%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.367	0.408	0.458	90%	80%
ふじ	果重(g)	246.6	209.1	158.1	118%	156%
	縦径(cm)	7.51	6.92	6.23	109%	121%
	横径(cm)	8.32	7.86	7.33	106%	114%
	硬度(lbs)	21.9	21.4	23.3	102%	94%
	糖度(Brix %)	10.3	10.1	10.9	102%	94%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.462	0.411	0.392	112%	118%

※ 平年値は平成28～令和7年（10か年）の平均値

1 中生種の収穫予想と着色管理

中生種の成熟は平年より2～3日程度早いと考えられる。

ただし、この後の気象条件により収穫期が前後するため、収穫の際は外観だけでなく、必ず食味を確認して判断する。

葉摘み作業は、中生種では収穫開始の20日前頃から、晩生種では30～40日前から2回

に分けて行う（表２）。１回目は果そう葉を主体に果実周辺の葉を軽く摘み取る程度とし、２回目は中生種では収穫２週間前頃から、晩生種では３週間前頃から新梢葉も含めてやや強めに葉摘みを行い、同時に玉回しも行う。

また、徒長枝の剪去や枝吊り、支柱入れは日当たり状況を見ながら随時行う。特に、「やたか」は果実が大きく、枝折れなどが心配されるので、こまめに枝吊りを行う。

表２ リンゴ中・晩生種の摘葉時期（県南部）

品 種	摘葉時期		収穫時期 （予想）
	第１回目	第２回目	
やたか	９月５日頃から	９月１２日頃から	９月２７日頃から
秋田紅あかり	９月１５日頃から	１０月１日頃から	１０月２５日頃から
ふ じ	９月２５日頃から	１０月１５日頃から	１１月５日頃から

２ 見直し摘果（樹上選果）

本年も日焼け果が多くみられている。日焼けは炭疽病の原因になるため、早めに園地を一巡して摘み取りを行う。併せて、肥大が劣る果実や著しい変形果、さび果、病害虫による被害果など、樹上選果をかねて摘み取る。

「やたか」、「シナノスイート」では、着色や地色の黄化が他より著しく早い果実は心かびが発生していることが多いため、収穫２週間前までに摘み取り、心かび果の混入を防止する。

３ 台風対策

事前対策として防風網の設置や主枝、垂主枝などの大枝には木柱を入れ、結束・固定を徹底する。わい性台木や幼木は、支柱の強度を確かめるとともに、結束部位の点検・補強を行う。さらに、枝が大きく振られることによる落果等を軽減するため、側枝の枝吊りを行う。

台風の接近により落果が懸念される場合、収穫期に入った果実は風が強くなる前に熟度を確認しながら収穫する。

格納庫や作業舎の周辺を整理するとともに、出入り口の点検と補強を行う。

４ 鳥害対策

カラス等による果実の食害は成熟や着色の進行に応じて増加するので、早めに防鳥糸を張るなどの対策を講じる。

５ 秋肥の施用

近年、果実の着色不良や落葉の遅れなどが問題となっているが、これは秋が暖かく窒素が遅効きしたためと考えられる。これまで施肥は年間２回、総窒素施用量は１０ａあたり８kg程度を基準としてきたが、近年の研究により、窒素を削減した体系でも安定的な果実生産が可能ながことが明らかとなった。この体系は、窒素量を年間平均気温から決定し、春肥での全量施用を基本とするものである（表３）。

樹相診断の結果、樹勢が適～強樹勢であれば秋肥は施用せず、弱樹勢の場合は秋肥を２kg程度施用する。肥料は果樹化成や尿素等の速効性肥料を用いる。施肥時期は「さんさ」、「つがる」など早生種は９月上旬、「やたか」、「王林」、「ふじ」など中・晩生種は９月中

旬～下旬とする。

表3 年平均気温を考慮したリンゴ窒素施肥基準

年平均気温* ¹	4月施肥量	樹相診断* ²	窒素施肥対策
11℃未満 (鹿角)	6 kgN/10a	樹勢 弱	追肥、もしくは4月の増肥* ³
		樹勢 強	4月施肥を3 kgN/10a
11～13℃ (横手)	3～6 kgN/10a	樹勢 弱	追肥、もしくは4月の増肥
		樹勢 強	4月施肥を0～3 kgN/10a
13℃以上	0～3 kgN/10a	樹勢 弱	追肥、もしくは4月の増肥
		樹勢 強	4月施肥を0 kgN/10a

- 1 過去 10 年間の年平均気温（近隣のアメダスデータを利用）
- 2 樹相は樹相診断基準に従って診断する。
- 3 年間施肥量が 10 kgN/10a でも樹勢が弱い場合、施肥以外による要因があると考えられるため、樹勢を低下する要因に応じた対策が必要。

6 「ふじ」への摘葉剤の散布

「ふじ」の収穫時期を11月5日頃とした場合、摘葉剤の散布は9月15日以降が目安となる（表4）。散布当日から最高気温が25℃以上の日が2～3日続くと効果が高いため、天気予報を参考に散布日を決定する。

摘葉剤の効果は散布1週間後から葉が黄変し、約2週間で落葉は終了する。その後、必ず手作業による摘葉を行って仕上げる。

ただし、衰弱樹や病虫害被害の著しい木では過剰に落葉する恐れがあるので注意する。

表4 「ふじ」の摘葉剤の使用法

剤名	使用時期	使用回数	希釈倍率	展着剤
ジョンカラープロ	収穫前40～50日前	1回	500倍	加用*

*果面の汚れ防止と低温時の効果安定のため、展着剤を加用する。

ブドウ

○生育状況

「巨峰」は着色が進み糖度が高いことから収穫期は平年より早い9月5日頃（平年：9月18日）、「シャインマスカット」は糖度が高いことから、収穫期は平年より3日程度早い9月15日頃（平年：9月18日）と考えられる。ただし、収穫期は今後の天候次第で前後する可能性がある。

表 1 県南部のブドウの生育状況（果樹試験場 9月1日現在）

品種	項目	計測値			対比(%)	
		本年	平年	前年	平年	前年
巨峰(無核)	1粒重(g)	14.0	12.6	11.9	111%	117%
	着色(指数)	9.1	7.6	8.4	120%	108%
	糖度(Brix %)	18.2	16.9	17.9	108%	102%
	酒石酸(g/100ml)	0.639	0.650	0.535	98%	119%
シャインマスカット	1粒重(g)	9.8	12.1	10.8	81%	90%
	着色(指数)	3.3	3.3	3.5	99%	94%
	糖度(Brix %)	17.1	16.6	17.7	103%	97%
	酒石酸(g/100ml)	0.429	0.378	0.270	114%	159%

※平年値は平成28～令和7年（10か年）の平均値。

※果皮色の判断は農林水産省果樹試験場基準果実カラーチャートのブドウ紫・黒色系カラーチャート値（C.C：0～12）及び黄緑色系カラーチャート値（C.C：1～6）を使用。

1 収穫の注意点

収穫は外観、食味を十分確認して行う。同一品種でも園地環境や果房の大きさ等により成熟が異なるので、熟度を確認して枝の先端や日当たりの良い部分の果房からすぐりもぎをする。

本年も「シャインマスカット」で縮果症や未熟果粒がみられている。また園地によって裂果も発生しているため、収穫前に一度除袋し、障害果粒を取り除くようにする。

「シャインマスカット」の熟度を秋田県版カラーチャートを用いて判定する場合、直射光を避け、日陰で比色する。なお、夕暮れ時は正確に判定できないので使用しない。

糖度18%以上の果房を得るには、果房の陽光面中央部で指数4が目安となる。ただし、700g以上の大房には、当てはまらない場合が多いため、必ず食味を確認して収穫期を判断する。なお、このカラーチャートは青色袋の使用を前提としているため、他の有色袋を使用している場合は色調が異なる。

果実や果実袋が濡れた状態で貯蔵するとカビや裂果発生の原因となるため、収穫は降雨中や降雨直後を避ける。また、果実の鮮度保持のため、作業は涼しい時間帯に行い、果粉を落とさないように穂軸を持って収穫する。なお、切り残した穂軸は、晩腐病などの越冬伝染源になるため、結果枝に残らないようにする。

9月は台風の接近が多くなる時期である。気象情報に注意し、台風の襲来に備え、事前に棚や支柱、ハウスの補強を行う。

2 出荷前の房調整

以下を参考に障害果粒は出荷前に取り除き、果房を調整する。

- ・日焼け果粒：樹冠外周部など日当たりの良い果房の陽光面に多い。
- ・縮果症：「シャインマスカット」など黄緑色品種で目立つ。
- ・未熟果粒：「シャインマスカット」で多く見られ、成熟果粒に比べ小さく、果皮の緑色が濃くて硬く、酸っぱくて著しく食味が劣る。
- ・生育停止果粒：「シャインマスカット」の強樹勢樹や一文字仕立て等で、7月下旬から多く見られている。果粒が濃緑色で果皮が硬いなどが特徴で、成熟に至らない。

1 秋肥の施用

秋肥は枝、幹、根への養分の蓄積を促す。この貯蔵養分は耐凍性を高めるとともに翌年の初期生育に用いられる。10月以降は葉の活性が低下し根の養分吸収量も低下するので、秋肥の効果を得るためには、速効性の果樹化成を遅くとも9月中に施用する。遅効性の有機質肥料を使用する場合は、9月15日頃までに施用する（表3）。

なお、新梢の葉色が濃く、新梢伸長の停止が遅く、副梢の発生が旺盛な場合は、施肥量を基準より少なくするか無施肥とする。

表3 モモの秋肥施用量

樹 齢	窒素施肥量 (成分kg/10a)
成木	4 ～ 5
8 ～ 9	3 ～ 4
7 ～ 6	2 ～ 3
4 ～ 5	1 ～ 2

2 秋季剪定

秋季剪定は、翌年に残すべき枝にしっかりと光を当て、翌年の花芽や結果枝の充実を図るために行う。

剪定の対象は、主枝や側枝など重要な枝に日陰を作るような強勢な枝や、主枝、亜主枝、側枝の基部から発生している強い徒長枝などである。ただし、切りすぎると樹勢の低下を招くので、最小限の剪定量とする。また、太枝を切る場合は切り口からの枯れ込みを防ぐため、発出基部より15cm程度残して剪除する。

剪定は収穫が終了してから9月20日頃までに終える。9月20日以降に収穫する品種では収穫終了後、速やかに行う。切り口の保護のため、剪定後は必ず塗布剤を塗る。